創刊号

発行
生駒市図書館
市史編さん係

# 市史編さん事業がスタートしました

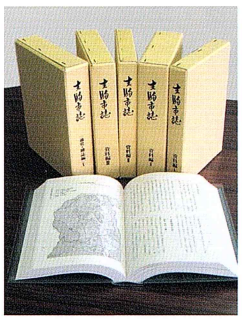
生駒市は令和3年11月1日に市制50周年を迎えました。それを記念して、生駒市史編さん事業がスタートしました。

▲リモートでの開催となった第1回生駒市史編さん委員会（令和3年5月7日開催）
編さん委員会参加者：吉川真司、天野忠幸、谷山正道、高木博志、神田雅章、山本昇、原井葉子、八重史子（敬称略・順不同）

50年ほど前、市制施行を記念して昭和に編さんした『生駒市誌』。その最終発刊から30余年が経過し、その間発掘調査や古文書調査など、各分野の調査によって新たな知見や資料が蓄えられました。再編さんの機が熟したことで、市内外の専門の研究者を招き、ボランティアのみなさまのお力を得て、「みんなで市史を編さんする」取組を進めています。市史の構成は、古代から現代までの歴史と美術工芸・建築・民俗・石造物・文学などの文化遺産、地理・動植物などの自然分野を収める4巻の本編と古文書の翻刻などを収めた史料集で、順次発刊する予定です。

ひとつのまちの歴史を編む作業は、過去を振り返るだけでなく、今後のまちづくりを考えるための視点や課題を明確にする作業といえます。市史を通して、まちの成り立ちやできごとを再発見し、先人の知恵や勇気にふれて、まちへの愛着を深め、将来の生駒市を考えていただくためにさまざまな情報を発信していきます。市史編さん事業への市民のみなさまのご理解・ご協力をお願いします。

また、編さん活動の経過や作業の中で確認した新たな資料の紹介、参加者のコメントなどを、本紙「生駒歴史タイムス（市史編さんだより）」でお知らせしていきます。みなさまのご愛読をよろしくお願いします。



▲昭和に刊行した『生駒市誌』

## 発行に寄せて

生駒市長　小紫雅史

令和3年度から生駒市史編さん事業を始めました。本事業にご参画いただきます、多くの先生方やボランティアのみなさまのご厚情に厚くお礼申し上げます。

『生駒市史』の出来上がりが今からとても楽しみです。編さん作業の折々の発見や貴重な資料との出会いによって新たな歴史を紐解く喜びが本紙でご報告できるよう努めてまいります。

市制50周年を経た今、次の50年がよりよいまちになることをめざし、先人のまちへの思いを受け継いで、新たな生駒の1ページを市民のみなさまとともにつくっていきたいと考えています。今後ともまちづくりへのご協力をよろしくお願いいたします。

## 生駒市史の編さん体制

生駒市史の編さん事業は、専門の学識経験者等が参加し、市史編さんの基本的・総括的な事項を協議し意見を述べる「**生駒市史編さん委員会**」と、分野ごとの内容や具体的な資料の調査、収集、整理、市史の執筆・編集に関する専門的な事項を分担して協議し意見を述べる「**生駒市史編さん委員会分科会**」と事務局（生駒市図書館市史編さん係）が市の部署から資料・情報の提供を受けて、ボランティアの協力を得ながら進めています。

「生駒市史編さん委員会」は令和3年度に2回の会議を実施。委員会での意見をもとに「生駒市史編さん事業に関する基本方針」などを策定しました。

また「生駒市史編さん委員会分科会」では下記の活動が行われています。

# 各分科会の活動報告

## 古代史分科会

2回の会議と発掘調査の出土遺物の確認調査を行いました。

6月　第1回古代史分科会
10月　第2回古代史分科会
　　市内出土遺物確認調査

## 中世史分科会

2回の会議とフィールドワークを実施。高山城跡・鷹山氏墓地（高山竹林園内）・高山八幡宮の巡検を行いました。

7月　第1回中世史分科会
11月　第2回中世史分科会・高山方面巡検
通年　中世史料調査

▲高山八幡宮本殿を見学しました

## 近世史分科会

1回の会議と市内所蔵史料の調査や天理大学附属天理図書館での史料調査を実施しました。

6月　第1回近世史分科会
7月　生駒ふるさとミュージアム所蔵文書調査
　　天理大学附属天理図書館所蔵史料調査
1月　大乗滝寺所蔵史料調査
2月　天理大学附属天理図書館所蔵史料調査

## 近現代史分科会

1回の会議を実施。その他、市内外に残る生駒市に関する史料調査や戦後の生駒駅付近について聞き取り調査を実施しました。

6月　第1回近現代史分科会
8月　生駒南小学校所蔵史料調査
10月　県立図書情報館 所蔵史料調査
11月　近畿日本鉄道所蔵史料調査
12月　生駒駅付近の聞き取り調査
1・2月　大乗滝寺所蔵史料調査
3月　第2回近現代史分科会（予定）
通年　明治～昭和発行新聞記事調査

## 文化遺産・自然分科会

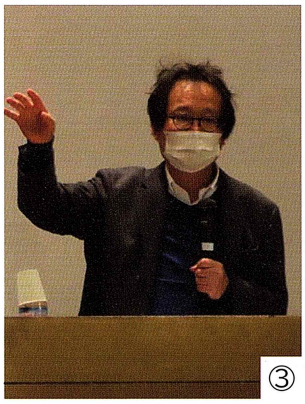
1回の会議を実施。分科会内で仏像・民俗・建造物などさらに細かく担当に分かれそれぞれ調査を行いました。

7月　阿弥陀寺仏像調査
8月　第1回文化遺産・自然分科会
1月　民俗分野打合せ
3月　第2回文化遺産・自然分科会（予定）
8月～2月末　歴史的建造物悉皆調査

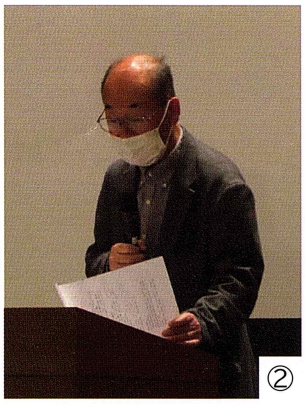
▲文化遺産・自然分科会のようす

# 市制50周年記念生駒市史関連講演会「生駒まち物語」を開催！

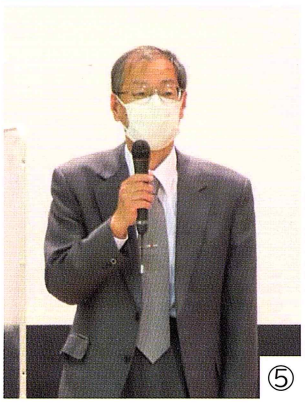
①



③



②



⑤

④

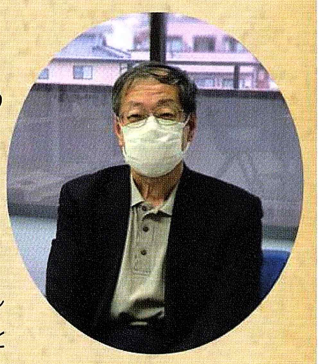
①講演後の質疑応答のようす ②奈良大学文学部非常勤講師の山上豊先生 ③京都大学人文科学研究所教授の高木博志先生 ④奈良大学文学部地理学科教授の稲垣稜先生 ⑤生駒市史編さん委員会委員長の谷山正道先生

11月13日(土)、講演会「生駒まち物語」を開催し、80名の参加者が図書会館市民ホールに集まりました。近現代史分科会の3名の先生が講師を務め、山上豊先生からは「近代生駒地域の形成と北倭・北生駒・南生駒の村々」について、高木博志先生からは「大軌電車開通の時代と生駒」について、稲垣稜先生からは「生駒市の都市化-住宅地化を中心に」についてお話いただき、市制施行の以前と以後の生駒の歩みを振り返る時間となりました。

講演終了後には、3名の講師が再度登壇。質疑応答が行われ、参加者から寄せられた質問にお答えいただきました。最後に生駒市史編さん委員会で委員長を務める谷山正道先生があいさつを述べ、講演会は幕を下ろしました。

今後もさまざまな歴史イベントを行う予定です。詳細は広報いこまちなどでお知らせします。

## 編さん委員長より



生駒市史編さん委員会
委員長　谷山正道 先生

今年度から市史の編さんという大きな事業がスタートしました。幸いなことに、市の編さん体制はしっかりしており、各分野で活躍され生駒に強い愛着や関心を抱かれている方々に編さんメンバーに加わっていただくことができました。コロナ禍のなかではありますが、スタッフの皆さんと力をあわせ、市史の編さんを着実に進めながら、生駒の魅力を発信していきたく思っています。

### 編集後記

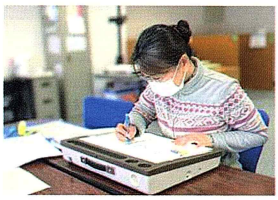
「生駒歴史タイムス」はじめました。かつての地方新聞「大和タイムス」に載る生駒の記事を調べていると「ヤマタイ」と略称で呼んでいた祖母を思い出しました。「ヤマタイ」にあやかった本紙。同じく「ヤマタイ」と呼ぶ、とある素人画家に頼んで生駒らしいタイトルのデザインが出来上がりました。

## 市史編さんボランティアが活躍しています

約20名のボランティアの皆さんが市史編さん室での史料の整理作業、翻刻作業、講演会でのイベント運営などに取り組んでいます。

### Interview：こんな活動、やってます

昔の地図を見ながら、地名(小字)を現代の地図に書き込む活動をしています。大阪と鉄道で繋がっていなかった時代でも、たくさんの人々が生活していたことが垣間見られて楽しいです。昔から残っている道や川も知ることができて、散歩に行く楽しみができました。



清水 綾さん

史料名：『**大阪より奈良まで沿道名所案内**』（大阪電気軌道、大正3年）（奈良県立図書情報館所蔵）

● 史料紹介 ●

# 電車が生駒にやってきた

文：高木博志
生駒市史編さん委員
京都大学
人文科学研究所教授

大阪電気軌道（現・近畿日本鉄道）が最初に発行した観光ガイドブックが、大正3年（1914）6月の『大阪より奈良まで沿道名所案内』（全100頁）である。

大軌は、明治43年（1910）に創立されたが、大林組の請負で社運をかけて生駒トンネルを開通させ、大正3年4月に大阪から奈良まで開業した。本書はその直後の発売である。大軌は、上本町停留場から奈良停留場までを50分で結び、湊町から奈良までの省線よりも25分早く、かつ安かった。開業からまもなく大正7年正月三が日には、省線の倍の約8800人の正月参詣者を、奈良・東向停留場に集めた（『奈良新聞』）。

本書は、「商業の大都大阪市と、風光と美術の古都奈良市とを、生駒峻嶺の貫通によりて連絡」すると、「総説」で大軌の目的を簡潔に伝える。奈良県政下の生駒が、圧倒的に大大阪の影響を受ける特色が、停留場の設置によって形づくられる。また大軌の副業として電灯電力の供給をうたう。まず大正3年に北生駒村に電灯がともり、翌年から北倭・南生駒へと家庭の灯りが広がってゆく。

起点の上本町停留場から鶴橋を東へ、石切では江戸期以来の辻子越が紹介され、生駒大隧道（トンネル）をすぎると生駒停留場である。歓喜天の霊験ある生駒聖天へは、「停留場より新道〔新参道〕を上る」。それまで、とりわけ明治28年（1895）に片町線住道駅ができてからは、大阪からの参詣者は龍間越で宝山寺へと歩いた。その後、大正7年（1918）には日本最初のケーブルカーができ、昭和4年（1929）の生駒山上駅までのび、参詣から郊外住宅・山上遊園へと発展してゆく。

本書には、すでに福茶屋旅館、瀧萬旅館などの広告が掲載されるが、大正10年の生駒町制頃には、新参道を中心に400戸、約1500人の新市街ができていた。この新参道が、大衆社会状況とともに大阪の奥座敷として、山麓は芸者、門前はヤトナ酌婦と一大花街に変貌していく。大阪・新町遊廓から移築した生駒演舞場が落成し、昭和戦前期には生駒芸妓が約150人、ヤトナ酌婦が50人以上を数えた（『生駒市誌』）。その他、大乗滝寺・長福寺・長命寺・生駒神社も紹介されている。

生駒停留場の開通により、江戸期以来、生産力の高かった北倭村を凌駕し、北生駒村は生駒町となり、戦後、南生駒村とも合併して生駒市制へと発展してゆくことになった。

本書は、国立国会図書館デジタルコレクションで全文読むことができる。

https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/948067

▲アクセスはこちらから